

牧野忠昌名誉館長による特別授業 要旨「伝統文化について」

伝統文化は皆さんが生活している中にあります。たとえば、お花を生ける華道、お茶（お薄）をたてる茶道も日本に古くから伝わっている伝統文化の一つと言えます。

今日私がお話するのは、普段あまり皆さんの目に触れないこと、また、一般の生活とは少しかけ離れた、伝統文化を紹介いたします。

それは大変古い時代、今から800年から1000年くらい前から始まり、現在でも続いていることです。この伝統文化を継承している人たちは、社団法人霞会館の会員たちで、私もその会員の一人です。現在、霞会館の文化事業として、6つの伝統文化の保存と普及を行っています。6つの伝統文化とは、^{ひこうかい}披講会、^{えもんどう}衣紋道、^{しちくかい}絲竹会＝^{しゅうきく}雅楽、^{こうどう}蹴鞠（けまり）、^{こうようかい}香道、^{こうようかい}向陽会＝和歌の6つです。

1 ^{ひこうかい}披講会について

披講とは歌会で和歌を読み上げることや、それをする人のことで、「披講会」は宮中の歌会で和歌を読み上げる行事のための会です。披講会は古くから行われていますが、現在では、毎年新春恒例の宮中行事として「歌会始の儀」が皇居正殿「松の間」で行われています。和歌を読み上げる人は8人で構成され、声は出さずに進行する役、最初に和歌を披露する役、和歌を鑑賞するために節をつけて披講する役などがあります。



（参考 公開講座での披講）

「歌会始の儀」では、最後に皇后陛下、天皇陛下の^{みうた}御製が披講されて終わります。

2 ^{えもんどう}衣紋道について

衣紋とは専門家が装束を美しく正確に着装する技術のことで、装束とは平安時代の着物のことです。

古くは平安時代に天皇に仕える人たちが、日常において宮中へ行く時に着ていた着物を^{そくたい}束帯と呼んでいました。天皇に仕える人というのは朝廷で仕事をする身分の高い人のことで、このような人を^{くげ}公家といいます。

当時朝廷に仕えるというのは男性だけで、宮中に行く時に着る着物が束帯です。この束帯は時代とともに、実用的な束帯からだんだん色合いや豪華さを楽しむようになってきました。やわらかい生地から堅い生地に変化



していきました。そのため、簡単には着ることができないようになり、装束を美しく着せる専門家が必要となりました。

現在衣紋道は、皇族方がいろいろな祭式でお召しになるときに着装のご奉仕をさせて頂いております。具体的には御大札、皇太子のご成婚の時などです。



3 絲竹会^{しちくかい}=雅楽 について

「雅楽」とは「俗楽」に対する言葉で、正しい系統の音楽を意味します。10世紀頃に今日の形に完成した日本のもっとも古い古典音楽です。

絲とは糸、すなわち弦楽器のことを意味しており、琵琶^{びわ}、お琴をさします。竹は管楽器を意味し、笙^{しょう}や龍笛^{りゅうてき}と呼ばれる笛のことです。

宮内庁にはこの雅楽を演奏する係の人がいて、国賓として来日された外国の方々をもてなすための晩餐会などで、日本古来の音楽を演奏しています。



4 蹴鞠^{しゅうきく}（けまり）について

蹴鞠は鎌倉時代の初め1200年頃から宮中や公家の間で盛んに行われるようになりました。「歌鞠両道^{かきくりょうどう}」と言われ、和歌と共に公家に必ず必要な教養とされていました。

蹴鞠を行う場所は鞠庭^{まりにわ}、又は鞠場^{まりば}と言い、広さは約12.6メートル四方です。その内側の約6.9メートル四方の四隅に松、桜、



楓、柳の木を立てて、その内側で行います。参加人数は正式には8人ですが、6人であることもあります。鞠をけるにはいろいろな作法や取決めがあります。鞠は鹿の皮で作られています。形はまゆ型で直径20センチくらい、重さは約120グラムです。

蹴鞠はサッカーのように攻撃や防御で点を取り合うものではありません。点数を競うのではなく参加した人たちが皆で鞠をけり続けて、鞠を地面に落とさないようにすることが良いとされています。上半身は動かさずに穏やかさを保ち、作法を守りながら皆の心をつにして、優雅にけるのです。

長岡藩の9代藩主牧野忠精公は宗家の飛鳥井家より最高位の免許状を頂いています。

5 香道^{こうどう}について

お香は仏教伝来と共に伝えられたと言われていいます。仏前を清めるためにお香を供える形で用いられました。その一つが仏様にお参りするときに使っているお線香です。

お香の香りを聞き分ける遊びが戦国時代から次第に普及し、江戸時代になって香道となりました。

お香はかぐとは言いません。お香を聞くと言います。円筒形の湯のみぐらいの大きさの香炉の中にお香がたかれています。大変微量なのでかすかな香りですから香炉を手で覆ってその香りを聞きます。その時は精神を落ち着かせて、五感を研ぎ澄まし、その香りを記憶します。違う種類のお香が数回出てきますので、最後にどの順番で回ってきたかを紙に記録します。最後に正解が発表されますが、香道も正解が多かったとか、勝った負けたを競うものではありません。

その季節に、その時間にふさわしい香りを、その場にいる皆様と共に感じ取り、気持ちを落ち着かせ、皆で良い時間を過ごすことが出来たということが出来れば良いのです。

6 向陽会^{こうようかい}=和歌 について

和歌を詠むことは古くから「たしなみ」の一つとして親しまれています。明治になって設立された「向陽会」は、冷泉家を中心にして、会員たちが和歌を詠む技術をすたらせることがないように活動しています。毎年1月初めに宮中からお題を頂き、そのお題に合わせて和歌を詠んで宮中に差し出しています。

冷泉家は藤原定家を祖先に持つ「和歌の家」として平安時代、鎌倉時代以来800年続い



ている公家の名門です。江戸時代の長岡藩主第9代牧野忠精は和歌の勉強もよくしており、この冷泉家から「和歌懐紙相伝」という免許状を頂いております。現在の当主は第25代冷泉為人さんで、お屋敷は京都御所の真北にあり、約200年前に建てられた現存する唯一の公家屋敷で重要文化財になっています。私も小さいころ京都に住んでいたので、冷泉家には何度も遊びに伺っていました。



日本の伝統文化は、古くから大切に伝えられてきました。外国から入った様式もありますが、日本人は、そのまま外国の真似をするのではなく、日本の生活や日本の四季にあわせてそれを取り入れて、伝えてきています。みなさんもこれから、日本の伝統文化について興味を持って、いろいろなことに積極的に参加してもらえると嬉しいです。

（平成25年1月10日 長岡市立脇野町小学校）

最後に、牧野名誉館長が持参された、香道に使われる「香木（真南蛮）」を実際に子供たちが手に取り、香りを体験しました。「おばあちゃんちのにおい」という声が多かったようです。

また、「十二単を着付けるのに、どのくらいの時間がかかりますか」「どのくらい練習すれば着付けができるようになりますか」などの質問が出たほか、「今とは違うことがたくさんあって、またそれを伝えている人がいることがわかって、うれしかった」「興味を持ったものについて、家で調べたいと思った」「将来もずっと、この伝統が続いているといいなと思った」などの感想がありました。



担当：長岡市立科学博物館